

### 【短報】クロシオガムシの本州における記録

クロシオガムシ *Horelophopsis hanseni* は Satô & Yoshitomi (2004) により、沖縄島（模式産地）と奄美大島の河口域から採集・記載された奇妙なガムシである。本種の奇妙さのひとつは、ガムシ科甲虫には珍しく、汽水域に生息するという生態的な特殊さにある。

その後、酒井（2005）は四国の愛媛県から、ま



図1. 兵庫県産のクロシオガムシ。



図2. 生息地（宮川）南岸から中州を望む。



図4. 濡れた砂泥上を歩行するクロシオガムシ（中央付近）。砂粒とほぼ同大。

た Yoshitomi & Nakajima (2005) が九州の宮崎県から本種の生息記録を報告している。筆者のひとり森も 2007 年に高知県仁淀川河口において、ウミホソチビゴミシの調査を行った折りに、多くの本種を確認しているが、この地の記録は中山（2009）により報告されている。

本州における生息記録は今のところ見あたらないが、秋田は三重県の伊勢湾流入河川で、また森は兵庫県の瀬戸内海沿岸の汽水域において、本種の生息を確認することができたので、新たな分布記録として報告しておきたい。確認記録は以下のとおりである。

＜三重県＞ 1 頭、伊勢市豊浜（宮川河口）、22. VIII. 2001, 秋田勝己採集；約 100 頭、伊勢市磯町（宮川）、8. VI. 2008, 秋田勝己採集；約 300 頭、同地、16. VI. 2008, 秋田勝己採集；約 300 頭、同地、5. IX. 2009, 秋田勝己採集。

＜兵庫県＞ 23 頭、赤穂市千種川下流、3. VII. 2011, 森正人採集。



図3. 生息地（宮川）採集風景。



図5. 表面が乾いた砂泥表面を水中で攪拌し、浮遊するクロシオガムシをネットで掬ったところ。胡麻粒のようなものがクロシオガムシ。実物は胡麻粒よりかなり小さい。

三重県における最初の採集例は、本種が記載される以前のものである。洪水後、河岸に漂着したゴミの中から抽出した。

2008年以降のものは、干潮時に中州に現れる干潟において日中採集したものである。確認できた生息範囲はせいぜい30mほどの間で、相当限定される。9月に採集した個体には未成熟のものが含まれることから、盛夏から秋にかけて新成虫が出現し、成虫で越冬するのであろう。幼虫などは確認していない。

潮が引くと濡れた砂泥上を歩き回る。個体密度は非常に高く、高密度で見られる部位では、50cm四方に50頭以上もの個体がみられた。やがて、砂泥表面が乾燥してくると、ごく浅く(数mm程度)砂泥にもぐり、表面で活動する個体はいなくなる。そして、そのまま満潮を迎えることになる。水没した状態では全く活動しない。この時、ハゼ科魚類の幼魚がきわめて多く、もし活動したら、すぐに捕食されてしまうものと思われる。水底を攪拌すると、水中を浮遊するが、泳ぐことはない。

同時にセスジマルドロムシ *Georissus granulosus* M. Satô を観察した。この種の日周活動や成虫出現期、体サイズは、本種とほぼ重なり、ニッチを共有しているものと考えられた。しかし、この甲虫の生息範囲は本種にくらべ非常に狭く、クロシオガムシの垂直分布上限付近に限られる。また個体数もはるかに少ない。他にはキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillelus yokohamae* (Bates) が観察されたが、このゴミムシが本来好むのは砂礫が多く堆積した部位であることから、個体数はさほど多くなかった。ウミホソチビゴミムシ *Perileptus morimotoi* S. Uéno もやや離れたポイントから1頭を得ることができた。また2種のナギサハネカクシ *Bryothinusa* sp. が多く見られた。

伊勢湾流入河川では、良好な河口干潟がみられる雲出川、櫛田川でも本種の探索を目的の一つとした調査を行ったが、本種を発見することはできなかった。

いっぽう兵庫県における確認場所は、兵庫県西部に位置する千種川の下流域で、干潮時に現れる川岸干潟において、多くのキバナガミズギワゴミムシやウミホソチビゴミムシに混じって得られたものである。引き潮の時にも水際や水底を攪拌す

ることで、多くの個体が水面に浮き上がるのが観察された。また、潮の引いた後の干潟表面では、濡れた砂泥上を歩行する多くの個体を確認することができた。本種を確認した千種川下流については、森は過去幾度かの汽水性甲虫を目的とした採集を行っている。2009年にはウミホソチビゴミムシを対象とした、かなり詳細な調査を行ったにもかかわらず、クロシオガムシはひとつも発見されなかった。しかし、2年後には多くの個体を見ることになった。今までに本種を確認したことがなかったことから、このときには「突然に湧いた」ような印象を持った。

以上のように、本種は本州においても複数箇所分布していることが明らかとなったが、その分布は一様ではなく、現状ではかなり局所的な傾向が伺える。生態的な知見も含めて今後の調査が期待される。

また、良好な河口干潟は、近年急速に失われてきた。本種が生息する地点は、非常に限定されること、同時に他の稀少種も生息することが多いことから、生息地の保全が強く望まれる。

文末ながら、愛媛大学の吉富博之博士には、いろいろと御教示いただいた。また、木村忠睦氏には秋田の調査に同行いただいた。感謝したい。

#### 引用文献

- 中山紘一, 2009. クロシオガムシ仁淀川河口に生息. げんせい, (85): 6.
- 酒井雅博, 2005. *Horelophopsis henseni* クロシオガムシを愛媛県から発見. 徳島昆虫, (15): 3-4.
- Satô, M. & H. Yoshitomi, 2004. Discovery of a second representative of the genus *Horelophopsis* (Coleoptera, Hydrophilidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan. *Elytra*, Tokyo, 32: 41-49.
- 吉富博之, 2006. クロシオガムシの発見とガムシ科の最近の扱い. 昆虫と自然, 41(14): 31-34.
- Yoshitomi, H. & J. Nakajima, 2005. A new record of *Horelophopsis henseni* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Kyushu. *Elytra*, Tokyo, 33: 376.

(〒514-1108 津市久居射場町 66D-304 秋田勝己)

(〒560-0883 豊中市岡町南1丁目1-1 環境科学大阪株式会社 森 正人)